



協同の地域づくりが広がっています

協同地域事業本部の高橋さんに話を聞きました。

抱樸館を支える会は「子どもの居場所作り」などのために2016年度に500万円、2017年度に1,000万円を寄附しています。その結果として、「生活や関係性に様々な困難を抱える子どもたち」への支援の輪が広がっています。

その「子どもの居場所作り」のサポートを行う一般社団法人グリーンコープ共同体 協同地域事業本部の高橋陽佑さんにお話を聞きました。



——協同地域事業本部の仕事の内容を教えてください。

「フードサポートの商品（グリーンコープの取引先メーカーや生産者などからの無償提供分や物流センターのロス品、グリーンコープ独自の無償提供品など）の受発注管理を行っています。また、朝食支援を行う学校や子どもの居場所づくりをしている人たちとの連絡・調整なども行っています」

——フードサポートが始まった経過を教えてください。

「フードサポートの始まりは、2016年度に福岡県のフードバンク活動モデル事業（課題検証事業）を受託してからです。これはグリーンコープが関係している17の取引先やメーカー、生産者から無償提供品やロス品を寄贈いただき

実現できました。また、モデル事業とは別にフードサポート先が少しずつ増えていき、まずは出会った先との関係を大切にするということで食料品の提供や相互の関係づくりを続けてきました」

「また、スクールソーシャルワーカーからの紹介でいくつかの小学校や中学校との関係ができ、フードサポートが可能かどうかの検討が始まりました。この時点で、当時の無償品やロス品の範囲では対応できないことが分かっていたため、現在のグリーンコープ独自の無償提供品の取り組みを始め、（一財）福祉活動組合員基金や（一社）抱樸館を支える会からも財政支援をしていただくことで支援ができるようになりました」

——現在、フードサポートは何箇所で行っていますか。

「モデル事業が開始された2016年は8箇所から始まりましたが、現在は49



箇所まで増えています。グリーンコープが直接運営したり、共同運営する子どもの居場所が6箇所、グリーンコープがサポートする地域の子どもの居場所が20箇所、教育機関での朝食・食育支援が11校、生活困窮者の相談支援機関12箇所となっています。また、現在実施に向

けて検討中、相談・協議中が2箇所あります」
——フードサポートの具体的な中身を教えてください。

「各サポート先の、開催タイミングは様々ですので毎週オーダーメイドで受発注しています。カタログにあるものはすべて対応するというようなフルサポートはしないように心がけています。たとえば学校の場合、すでに地域の農家や企業、お店と関係を築いている場合がありますので、グリーンコープがフルサポートするのではなく、その関係性や主体性を大切にしていきたいと考えています。

その他、定期的な受発注以外では学校等のイベントでの食料要請にも対応します。学校や地域の祭り、学校と子どもと保護者の繋がりで試食会を開催する場合にも相談があります。そのほか夏休みや冬休みのイベントでも依頼がありました」

——支援の輪はどうやって広がっていくのですか。

「子どもの居場所やフードサポートの取り組みは、グリーンコープの組合員、職員、ワーカーズなどが相互に連携し助け合いながら取り組むことを確認して進められてきています。また、グリーンコープと地域（団体）との関係性においては、現在は個別具体的に取り組みの内容を構築していますので、支援先ごとに支援の枠組みや連携のされかたも様々です。共通しているのが、

グリーンコープとサポート先との思いや方向性が一致



し、お互いが相手の取り組みに共感でき、信頼関係が構築できる場所であるということです。この点は、フードサポートを始める前に必ず確認しています。

新たな支援先が広がるきっかけとしては、教育機関では既に取り組んでいる学校の校長先生の異動で広がることが多い印象です。他には、グリーンコープ生協ふくおかが福岡県から事業

を受託している『高校生の就学継続のための訪問相談支援事業』や『子ども支援オフィス』などを通じて話がある場合もあります」

——地域での支援の広がりについて教えてください。

「子どもの居場所も学校も地域に根ざしているからこそ、多様な関係性の広がりが見られますし、関係性の豊かさにもつながっています。事例やノウハウも積み重なってきています。ある地域で課題になっていることが、他の地域では解決できている例もありますので、お互いが学び合いになるようなコーディネートも実施しています。逆に、グリーンコープが地域と関係して実施したい子ども支援事業についてご相談することもあります。関係と取り組みの継続が信頼と新たな連携を生み出しています」

——これからの思いを教えてください。

「協同地域事業本部という部署名が単純に『フードサポート部』とならなかったのは、地域づくりという側面もあるからだと考えています。グリーンコープだけでない様々な地域の取り組みにも関係し、アンテナを張り、連携できればと思います。フードサポートを行っている



地域の居場所がグリーンコープ外の様々な支援先との出会いにより、グリーンコープがサポートする食料品の量が減っていったとしても、相互の連携は深まるような関係を構築していきたいと考えています。つまり、大きなビジョンは『協同の地域づくり』で、その取り組みの一部にフードサポートという運動・事業が組み込まれています。最も意識していることは、『あくまでも地域が主体である』、『相互が取り組みに共感し尊重し合う信頼関係』です。主体を大事にしつつ、同時にお互いが手を伸ばしたらすぐにつながれるような距離感を意識していきたいです」

——ありがとうございました。

卒業生同士の繋がりへの橋渡しをしたい

抱樸館福岡のアフター部門の取材を行いました。

2018年度から、卒業生の地域生活をアフターフォローする「アフター部門」のメンバーが増員されました。

——坪田副館長にお聞きします。体制が増えたそうですね。

「私と、以前から担当だった久保相談員に加え、4月から田中相談員と篠原相談員が新たにメンバーとして加わり、アフター部



門の体制が4名となりました。昨年までは現場担当が久保相談員の1人だったため、緊急を要する相談・対応に追われ、それに付き切りになっていました。それに加え、卒業生は年々増えていくので、これまでは定期的な巡回訪問ができていなかったことが課題でしたが、2人が加わることで課題解消できました。

現状でいえば、緊急的な対応は私と久保相談員で、巡回訪問は田中相談員と篠原相談員で対応しています。これまでできていなかった定期的な巡回訪問を行うことで、卒業生の間でもこの巡回訪問をしていることが伝わり、感謝されているようです」

——前職は何をされていたのですか。

田中相談員「グリーンコープ生協ふくおかを定年退職し、その後2年ほど生協の支部で組合員を増やす仕事を行っていました。その後はグリーンコープで介護の資格を取って障がい者の訪問介護の仕事に携わり、今年から抱樸館福岡で現在の業務についています」

篠原相談員「グリーンコープ連合会商品本部で商品関係の仕事をしていました。定年退職後も引き続き嘱託として同様の仕事を続けていましたが、65歳になった今年、余暇にやっていた菜園グループのメンバーである田中さんから誘

われて抱樸館で働くことになりました」

——抱樸館福岡で勤務した感想は。

田中相談員「入居者だけでなく、卒業生との面会件数の多さに驚いています」

篠原相談員「働き始める前から会報などをみていたので、そこまで大きなギャップはなかったです。しかし、現実に卒業生と接することで、体調や金銭的な部分でそれぞれが生活に様々な大変さを感じていることを実感しています」

——訪問活動について教えてください。

田中相談員「770人の対象者を全戸訪問しましたが、卒業生にお会いできたのは半分くらいですね。1日6件の訪問を目途に巡回訪問しています。訪

問すると

『1週間、誰とも話をしていない。訪ねて来てくれて嬉しい』という



方もいて長話することもあります。孤独で寂しいのだろうと思います。訪問の他には、卒業生の病院同行や入院する際のサポート、部屋の片付けや引越しの手伝いなど様々しています」

篠原相談員「訪問してみても門前払いにいたり、今まで訪問していた方がお亡くなりになっていたりした際は辛いです。しかし、訪問したことに対して『ありがとう』と言ってもらえたり、抱樸館福岡入居時の頃を楽しく語られたりすると、とても嬉しく思います」

——訪問活動で印象に残っていることはありますか。

「訪問したら卒業生が部屋で倒れていたことがありました。その方は心臓が悪くて病院に通院されており、毎回付き添っていました。しかし、連絡が途絶えたため福祉事務所のケースワーカーに連絡を取り、警察と管理会社に部屋に入っ

てもらったところ、倒れていたのですが、幸いにも一命を取り留めたということがありました。本当に良かったのですが、これは抱樸館福岡の卒業生だけでなく、地域で生活されている独居老人全体の問題だと思えます。」

——訪問活動を続けて、特に思うことを教えてください。

「抱樸館福岡を出たあとの3ヶ月程度は見守りを強化したいと思います。仕事を決めて、抱樸館を退居し、その後、仕事が続かず悩む方も多そうです。これまで共同生活をしていた方が単身居宅となり環境が変わって落ち込む方も多いため、そのときに何かないようフォローや見守りが必要と感じます」

——今後取り組みたいことはありますか。

田中相談員「卒業生が困った時にどのようにフォローできるかが大事だと思います。地域の卒業生同士で見守りをするとか、連絡が相互に取れる関係を作っていくたいです。生活の困りごとを聞き出し、もう一步踏み込んだ対応ができる仕組みづくりが必要と感じています。良い例としては、ある20室くらいのアパートに6人の卒業生が入居しており、その卒業生の方達は2日連続で部屋の電気がついていなかったら声を掛け合うようにしているそうです。このように近所付き合いができればよいのですがほとんどが孤立している状況です。そんな卒業生同士の繋がりや橋渡しができれば良いと考えています」

篠原相談員「訪問した日時や内容を記録、分析しているので、卒業生それぞれの状況に応じた訪問ペースなどを管理していけるようにしたいと考えています。また、高齢の方で電話では話がうまくできないという方もいらっしゃるため、卒業生たちが積極的に返事を書きたくなるような往復はがきを準備したり、文通のようにいつでも返信できるようなハガキをお渡ししておくなど、卒業生たちが抱樸館とのやりとりを楽しんでくれるような取り組みを行うことができればと考えています」

——ありがとうございました。

抱樸館福岡で「偲ぶ会」が開催されました

2018年9月24日

抱樸館福岡を退居されたあとお亡くなりになった卒業生に対する「偲ぶ会」が開催されました。抱樸館福岡の遠竹館長に詳しくお話を聞きました。

——初めて開催されたそうですが、これまでお卒業生がお亡くなりになった場合はどのようにされていたのですか。

「卒業生がお亡くなりになった場合、身寄りの無い方は抱樸館福岡が葬儀を行い、遺骨は北九州市にある東八幡キリスト教会へ納骨をお願いしていました」

——偲ぶ会を開催したのはどんな経過がありますか。

「卒業生を中心としたボランティア活動の会として『えにしの会』があります。その世話人会である『つくしのつどい』を毎月開催しています。昨年9月に開催した『つくしのつどい』では、自分



の心配や、仲間達の墓参りなどについて意見交換を行い、メンバーの皆さんが自分の入る墓に対して不安をお持ちであることが分かりました『つくしのつどい』でこのような意見が出たことを受けて、今年の初めに『えにしの会』のメンバー全員へ、墓に関するアンケート（もしもの時に、自分の墓が心配であるかどうか）を兼ねた往復はがきを郵送しました。送付したのは計126名で、うち54名からの返信がありました。そのなかの半数にあたる方が『自分の墓が心配である』と回答されました。

その後、2018年3月に『えにしの会』全体

のつどいを開催しました。つどいの当日は総勢38名が参加し、このアンケートの結果を『えにしの会』としてどのように受け止めるのかを5つのテーブルに分かれて議論しました。自分の入る墓の心配や、『仲間の追悼をしたい、えにしの会のメンバー皆で毎年墓参りに行きたい』といった意見が多く出ました。

これを受けて、6月には、居所が分かる卒業生656名全員に対して、お墓に関することと『偲ぶ会』の開催に関するアンケートはがきを郵送し、143名から返信がありました。そのうち、『自分が入る墓について不安がある』と回答された方が73名、『偲ぶ会を開催できたらいいと思う』と回答された方が102名もいらっしゃいました。



これまでの意見交換やアンケートの結果を受けて、抱樸館福岡では、墓の建立(※)と『偲ぶ会』の企画を取り組みはじめました」

——開催まではどのような準備を行いましたか。

「抱樸館福岡として偲ぶ会を開催するのは初めての試みでしたので、9月に『えにしの会』のメンバーと抱樸館福岡の職員で、NPO法人抱樸の互助会が開催した偲ぶ会に参加しました。ここで会場のレイアウトや進行、雰囲気など多くのことを学ぶことができました。また、当日のレイアウトや飾り付けについては『つくしのつどい』のメンバーを中心に進めました」

——どれくらいの参加がありましたか。

「偲ぶ会の開催日時は彼岸の9月24日の10時30分～11時30分に決定し、卒業生には毎年送っている暑中見舞いやきせつだよりの文面、電話掛けで案内をしました。その結果、当日は、卒業生46名をはじめ計77名の参加がありました。卒業生は普段からよく来館してくれている方以外にも、『仲間を偲ぶ会だから』

ということで久々に来館してくれた方もたくさんいらっしゃいました」

——当日の流れについて教えてください。

「朝9時30分から『つくしのつどい』のメンバーを中心に会場設営を行いました。参列する卒業生も10時前から続々とお見えになりました。初めての会ではありましたが、しめやかな中にも故人を偲ぶ、ゆったりとした時間を持つことができました。

今回の開催の目的やお墓の購入についての経緯を説明し、『えにしの会』からは会の活動紹介、黙祷の後に全員で献花を行った後、今年お亡くなりになられた9名の思い出を縁のある職員や知己の卒業生が語りました。そして、最後に全員で『ふるさと』を合唱して閉会としました。

閉会後は、入居者、卒業生、職員らで、偲ぶ会の余韻に浸りながら抱樸館で一番の人気メニューであるカレーライスを食べました。おいしいカレー

ライスを食べられることが参加の決め手になったと言う方もいらっしゃいました。



翌月に開催された『つくしのつどい』でも、とても良い会だった、来年も絶対参加します、という感想をいただきました。来年はお墓も完成していますので、さらに趣のある『偲ぶ会』になると思います」

——来年が楽しみです。ありがとうございます。

※2018年12月3日に共同墓地の建立式と納骨式を行いました。後日、会報にてご案内します。

抱樸館福岡は生活の「より所」になっています

藤田晴男さんにお話をお聞きしました

藤田さんは、昭和16年（1931年）3月生まれで現在77歳です。抱樸館福岡には2011年5月に入居されました。現在は抱樸館近くのアパートで生活されています。

——生まれとご兄弟のことを教えてください。

「山口県山口市で生まれました。3人兄弟の末っ子で24歳上の兄と12歳上の姉がいます。実はもう2人兄がおり、物心ついた時には戦争に行っていました。私が小学校1年生の頃、帰宅したら見知らぬ男性がいたのでびっくりしていたところ、『お前の兄貴だ』と言われさらにびっくりしました。芝居小屋で観劇していた両親を慌てて呼びに行きました。兄は戦前映写技師をしており、戦争中も兵士慰安用の映画上映をしていたみたいです。父は大内塗（※注 山口県の漆器）の職人だったので家庭は裕福でした」



——中学校を卒業されて、就職されたのですか。

「私は中学校を卒業する前から働いていました。当時の中卒は『金の卵』と呼ばれており、就職には困りませんでした。同級生の多くは夜行列車で東京に行きました」

——どのようなお仕事をされていたのですか。

「牛乳工場で働いていました。搾乳された牛乳の殺菌、瓶詰め、配達までしていました。今でも銭湯とかには売っていますが、昔の牛乳はほとんどがビン牛乳で紙のフタが付いていました。この紙のフタは機械がつけるのですが、その上からさらにビニールキャップをつける工程があるのですが、それは手作業でやっていました」

——待遇はどうでしたか。

「給料は1日70円、1ヶ月で2,100円ほどでした。当時はパンが10円の時代で散髪が120円の時代でした」

——ずっと牛乳工場で働いていたのですか。

「牛乳工場では給与遅配が続いたので20歳で辞めました。牛乳工場のあとは看板屋3件で働いていました。看板屋では絵を書く先生がいるのですが、その先生の元で木型のくり抜

き等をしていました」

——看板屋で働いていた時大きな病気にかかったそうですね。

「40歳の頃に両親を亡くし、喪失感からお酒を覚えました。そして42歳の頃に結核になり、山口赤十字病院に1年間入院し、サナトリウム（※注 長期的な療養を必要とする人のための療養所）で1年間過ごしました。その時に医療扶助を受け、生活保護を受給することになりました。定期的にCTスキャン検査をしていますが、現在まで問題はありません」

——療養期間が終わったあとはどうされていたのですか。

「サナトリウムを出てからは旅館に住み込みで働いていました。そこでは配膳主任をしており、見本を見ながら盛り付けをしたり、配膳の管理をしていました」

——その頃にご結婚されたそうですね。

「働いていた旅館の仲居さんと1回目の結婚をしました。結婚は3回しています。その結婚は駆け落ちで私が当時42歳、妻が22歳でした。しばらく2人で旅行をした後、お金が無くなったので夫婦でパチンコ屋に住み込みで就職しました。しかし、結婚生活は5年で終わりました。2回目は結婚して数年後に妻がガンになり亡くなりました」

——パチンコ屋での勤務は続けていたのですか。

「山口県の自動車製造機器会社に臨時工として就職しました。すぐに富山県高岡市の工場に長期出張になりました。そこで、スナックで働いていた女性と結婚しました。57歳のときでした。富山県での結婚生活は旅館のオーナーのご厚意で離れ屋を貸していただき、そこで同棲していました。しかし、臨時工であったためクビになってしまいましたが、旅館のオーナーから富山県の土木会社を紹介してもらったのでそこに転職しました」

——日本全国移動されていますね。

「今度は小倉に行きました。妻が私の兄弟に会いたがっていたので山口県に帰郷し、兄弟に会ったあと、1週間ほど山口の色々なところを観光しました。そしてお金が無くなってきたので小倉で人夫出しをしていました。妻はその人

夫出しの寮で炊き出しの仕事をしていました。その後博多の人夫出しに移りました。その当時は山陽新幹線を博多まで延伸しているときだったので、仕事に困ることはありませんでした」
——人夫出しでも安定した収入が得られる時代だったのですね。

「そうですね。仕事は沢山ありましたから生活に困ることはありませんでした。」

——ではこのときから博多で生活を始めたのですね。

「ええ、そうです。しかし、妻が肝臓がんになってしまいました。私は仕事があるため博多に残ったのですが、妻は実家の茨城県の姉のもとで闘病生活をするようになりました。幸い治療がうまくいき闘病1年目は元気でした。はなれ離れの闘病中はたくさん100円玉を集め、毎週公衆電話で連絡をとっていました。しかし、闘病2年目に肺に水がたまるようになり、亡くなってしまいました」

——それはたいへん辛かったですよね。

「妻のことはとても愛していたため喪失感が大きく、なにもする気が無くなってしまいました。妻の死を忘れるため深夜までお酒を飲み、6時に出勤する生活を送っていました。葬式にも行っていません。しかし、今でも写真を飾っています。バラが好きだったので、バラとお酒をお供えています。」

——仕事は続けたのですか

「その時は人夫出しから大手ゼネコンの孫受け会社で働いていました。65歳になると足場で作業をする際に、元請けに必要な書類を提出しなければいけないのですが、その会社がなかなか書類を作ってくれなかったので、夜に寮を飛び出してしまいました」

——そこからホームレス生活が始まったのですか。

「その時は30万円位持っていたので、久留米に行って健康ランドで過ごしていました。5月3日に博多どんたくが見たくなり、博多に出てきました。そしてそこでお金が尽き、福岡空港近くの公園でホームレス生活を始めました」

——ホームレス生活は大変だったんじゃないですか。

「雨の日は辛かったです。雨の日は公衆トイレで過ごしていました。着の身着のまま出てきましたので、着替えがないのお風呂に入れない

いのが辛かったです」

——ホームレス生活は野宿だったのですか。

「ダンボールで簡単に住处を作り生活していました。新聞紙は温かいんですよ。新聞紙は取り合いになっていましたね」

——どのような経緯で抱樸館福岡に入所されたのですか。

「公園管理の区役所職員に声を掛けられ事情を話したところケースワーカーを紹介してもらい、博多区役所に相談に行きました。そこで抱樸館福岡を紹介され入所しました。その時70歳、ホームレス生活は10日間でした」

——抱樸館での生活はどうでしたか

「福村相談員、上野相談員にとっても良くしていただいたので嫌なことはありませんでした。抱樸館では車輛の清掃やグリストラップ(※注 厨房から直接下水に油等が流れないようにする機器) 清掃のようなボランティア作業がありますが、すべてやりました。抱樸館には5ヶ月いました。」

——現在の生活の様子を教えてください

「毎朝、箱崎公園を5周(1周1, 225m)歩いています。その後抱樸館に寄って朝顔や他の植物の水やりをしています」



——抱樸館のイベントにもボランティアとして参加されているそうですね。

「月に1回公民館で開催される料理講習会に参加しています。そこでは買い出しを担当しているので、いかに予算内で食材を揃えるのか試行錯誤しています。スーパーにも詳しくなりました」

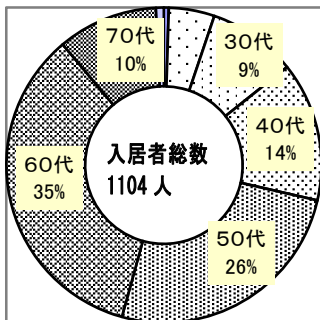
——今のお気持ちを聞かせてください。

「抱樸館に入ったおかげで立ち寄る居場所ができました。また、9月24日に抱樸館で今まで亡くなった方を『偲ぶ会』が開催されたのですが、とっても良かったです。また、1年かかりましたが、抱樸館福岡でお墓を購入することになりました。無縁仏にならないので安心してます」

——藤田さん、本当にありがとうございました。

抱樸館福岡の入居・退居などの状況

開所から2018年10月末までの入居者数



	人数	割合
10代	5	0.5%
20代	52	4.7%
30代	100	9.1%
40代	158	14.3%
50代	284	25.7%
60代	382	34.6%
70代	114	10.3%
80代	9	0.8%
計	1104	100%

2018年10月末現在の入居者

67名(定員81名) 男性66名、女性1名

2018年9～10月の新入居者数・退居者数

新入居者数24名 退居者数12名

(注: 01月末までの入居者数1104人は、
2度・3度入居した人も1人と数えています。)

抱樸館北九州の入退居の状況は、特集の際にご案内します。

抱樸館を支える会の概要

抱樸館を支える会の目的

以下の事業・活動を目的としています。

- ◇ホームレス者支援事業
- ◇抱樸館に関する広報活動及び資金援助活動
- ◇これらに付帯又は関連する事業

設立年月日: 抱樸館福岡が2010年5月に開設されるのにあわせて同年4月10日に設立

正会員: 以下の17団体が正会員です。

- グリーンコープの各単協(14生協)
- グリーンコープ連合
- NPO法人 抱樸(旧:北九州ホームレス支援機構)
- 社会福祉法人グリーンコープ

賛助会員

2018年11月末の賛助会員は、以下の通り

- グリーンコープの共同購入組員 9149名
- グリーンコープの店舗組員・一般の方 183名
- 企業賛助会員 105社

その他(抱樸館の所在地)

- 抱樸館福岡(福岡市東区) 2010年5月開所
- 抱樸館北九州(北九州市八幡東区) 2013年9月開所
- 抱樸館下関: 新たに開設を準備中
- 抱樸館熊本: 準備中

抱樸館福岡の見学のご案内

- グリーンコープ生協として見学される場合は、所定の用紙でお申ください。
- 個人もしくは知り合いと一緒に

に見学される場合は、直接抱樸館福岡にご連絡ください。

- ◇出来れば5名以上でお願いします。(ホームページからも見学の申込が出来ます)

なお、1名あたり1000円の見学料をお願いしています。これには昼食代を含んでいます。昼食は入居者が日ごろ食べている食堂で同じものを食べていただきます。

抱樸館を支える会 賛助会員と会費について

抱樸館を支える会 賛助会員募集

賛助会員を募集しています。
賛助会員には、会報をお届けします。

グリーンコープの共同購入組員

賛助会員の申込には2つの方法があります。

- 毎月250円の賛助会費を申し込みいただく(年間で3000円です)

毎月の商品代金と一緒に引き落としとなります。

共同購入申込書の1300で申し込みください。

- 101000円の賛助会費を申し込みいただく。何口でも申し込み出来ます。

申し込みいただいた月の商品代金と一緒に一括して引き落としとなります。

共同購入申込書の1299で申し込みください。

賛助会員は一度申し込みいただくと毎年更新されますので新たに申し込みいただく必要はありません。(グリーンコープの共同購入組員の場合)

①の賛助会員は毎月継続して250円請求させていただきます。②の会員は申し込みいただいた月に毎年一括して請求させていただきます。

一般の方、グリーンコープの店舗組員

101000円の賛助会費を何口でも申し込み出来ます。

郵便振替でお願いします。

郵便振替 01710-0-123003

一般社団法人 抱樸館を支える会

企業賛助会員 募集中です

企業賛助会員は、会費が1010,000円です。出来れば30(30,000円)以上でお願いします。申し込みは、下記へ。

「抱樸館を支える会」事務局

〒812-0011

福岡市博多区博多駅前1丁目5番1号

社会福祉法人グリーンコープ

担当 家原 電話 092-482-1964

抱樸館の連絡先

抱樸館福岡 (電話 092-624-7771 FAX 092-624-7772)

〒813-0034 福岡市東区多の津5丁目5-8

抱樸館北九州 (電話 093-883-7708 FAX 093-883-7705)

〒805-0027 北九州市八幡東区東鉄町7-11